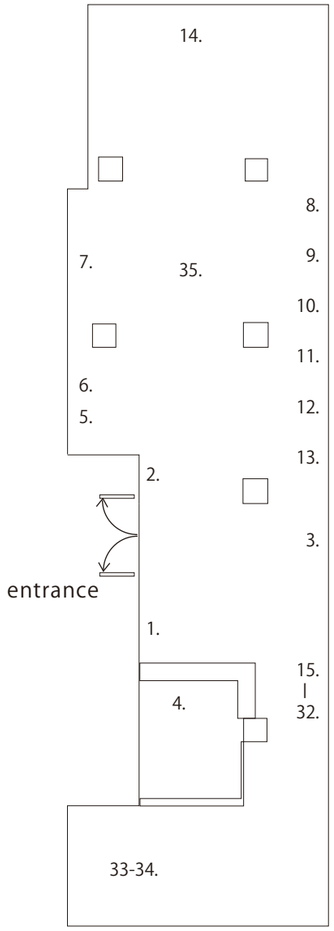
αM プロジェクト2019

東京計画 2019 Plans for TOKYO 2019

ゲストキュレーター：藪前知子（東京都現代美術館学芸員）

vol.5　中島晴矢
東京を鼻から吸って踊れ

2019 年 11 月 30 日（土）～ 2020 年 1 月 18 日（土）
(冬季休廊：12月26日～1月6日)



1.《high school emblem》
2019｜ミクストメディア｜61 × 51 × 8.5 cm

2.《普請石》
2019｜黒御影石｜30 × 40 × 2 cm

3.《Tokyo Sniff》
2019｜映像 12 分 44 秒

4.《芝浜駅》
2019｜バックライトフィルムプリント、LED ライトパネル
29.7 × 84.1cm

5.《Close Window》
6.《Open Window》
2019｜フランス窓のミニチュア、ペンキ、ガムテープ
各 75 × 60 × 4 cm

7.《Tokyo Suicide Girl Returns》
2019｜インクジェットプリント、アクリルマウント
126.1 × 84.1 cm

8. 《New World Border -OLYMPIA1896-》
9. 《New World Border -OLYMPIA1936-》
10.《New World Border -OLYMPIA1964-》
11.《New World Border -OLYMPIA1972-》
12.《New World Border -OLYMPIA1980-》
13.《New World Border -OLYMPIA1984-》
2018-2019｜テトロンバンテンに昇華転写プリント、パネル｜各 118.9 × 84.1 cm

14.《TOKYO CLEAN UP AND DANCE !》
2019｜映像 17 分 59 秒

15 - 32.《Tokyo Barracks》
2019｜絵葉書、ペン｜各 14.9 × 20 × 3.4 cm

33.《Shuttle RUN for 2020》
2017｜映像 7 分 46 秒

34.《Shuttle RUN for 2021》
2019｜映像 10 分 4 秒

35.《EED ― Empty Emperor Donut ―》
2019｜ミクストメディア｜30 × 30 cm

1. high school emblem
地区：港区麻布

私の「東京の原風景」は、中学高校時代、横浜市のニュータウンから通った、山の手にある麻布である。学校の校庭からは、東京タワーを右手に、ちょうどニョキニョキと伸びていく六本木ヒルズを左手に眺められた。
麻布という地名の由来は諸説あるが、かつてこの地に麻を多く植え、布を織り出していたところからきているそうだ。麻と言えばマリファナだが、麻布にはたくさんの大麻が生い茂っていたのだろうか。
2018 年からカナダで娯楽目的の使用が合法化されたように、大麻は世界的には解禁の流れだ。一方日本では、未だに大麻の所持は重大な犯罪として取り上げられる。もちろん単純に礼賛するつもりはないが、少なくとも私には、同じ植物がある土地では合法的な嗜好品で、ある土地では非合法な薬物だという区分に、合理性を感じられない。それはどこか、他校にはないのに自校にはある、理不尽な校則みたいだ。
幸い、学園紛争の名残で母校に校則はなかった。有栖川公園を上がった丘にある校門にはいつも、麻の葉文様(Hemp leaf pattern)に「高(high)」と書かれた校章が掲げられていた。

2. 普請石
地区：中央区銀座

明治 43 年に発表された森鷗外の「普請中」は、官吏である渡邊と、彼がドイツにいた頃の恋人だった女が、京橋区木挽町(現・中央区銀座)で会食する短編小説だ。
渡邊と女が訪れる築地精養軒 (後に関東大震災で焼失) は「普請最中」、すなわち改築工事中であり、大工たちが釘を打つ音や手斧をかける音が騒々しく聞こえてくる。この舞台設定が、近代国家を建国途上である明治期の日本のメタファーなのは自明だ。渡邊の言葉を借りれば、「日本はまだそんなに進んでいないからなあ。日本はまだ普請中だ」ということになる。
そんな東京及び日本は、令和になった今もなお「普請中」だ。祝祭と開発はコインの裏表で転がり続けている。何より、一見すると落成されたかに見える近代国家もまた、その内実において、前近代的な骨組みを手つかずのまま残していると感じる事柄は、枚挙にいとまがない。ふと周りを見渡せば、多くのビルやマンションに、「定礎」と書かれた石板が埋め込まれていることに気づく。このプレートは、建物の竣工時に設置されるそうだ。しかし、この街にもこの国にも、〈完成〉なんてないのではなかったか―――。であるとすれば本来、石板には「定礎」ではなく、「普請中」と彫られていなければならないはずだ。

3. Tokyo Sniff
地区：新宿区西新宿

東京の政治的なシンボルは、どうしたって東京都庁舎になるだろう。1991 年に丸の内の旧都庁舎から新宿副都心へと移転した現都庁舎は、都の行政の中枢機能を担っている。新旧共に丹下健三の設計であり、現都庁舎はパリのノートルダム大聖堂を参照した、所謂ポストモダン建築だ。
この高層ビルのロビーにて、港区の防潮扉で発見された「バンクシー作品らしきネズミの絵」(！) が一般公開されたことも記憶に新しい。普段、グラフィティをイリーガルなものとして処理している“公”が、ポピュラリティと市場価値を有する落書きを恭しく保護するという矛盾について、論理的に整合性のある説明は未だ聞かされていないが。
ちょうど同じ時期には、あるミュージシャンのコカイン使用による逮捕劇があった。むろん法を侵すのは望ましくないが、それに付随するメディアの過剰報道がアディクションの治療を疎外し、世間が道徳的・感情的に人格を裁いて、その「作品」までをも社会的に抹消するような風潮には、やはり違和感を覚えざるを得ない。
かつて同じく丹下が構想した「東京計画 1960」は、都庁舎と違いアンビルドに終わった。そのマスタープランを鳥瞰図で見ると、東京湾上に白い幹線が錯綜していて、まるでコカインのホワイトラインのようだ。
東京を砕き、白いラインを時空に引いて、とにかく鼻から吸ってみる。

4. 芝浜駅
地区：港区港南

2020 年春に暫定開業予定である JR 東日本の新駅の名称が、「高輪ゲートウェイ」に決まった。駅名は公募制を採用しており、応募数では 1 位が「高輪」、以下「芝浦」「芝浜」と続いていたにもかかわらず、130 位だったこの名前が選ばれている。
当然その不透明な決定プロセスには釈然としないが、公募案にもあるように、新駅の辺りは落語「芝浜」の舞台だ。「芝浜」は明治の落語家・三遊亭圓朝の作とされる古典落語であり、裏長屋に住む貧乏暮らしの魚屋が、芝の浜辺で四十二両という大金の入った革財布を拾ったものの、女房はそれを夢だと言い張る―――そんな夫婦の人情噺である。
この名作のタイトルを引用しなかった、否、できなかったのは、不動産ビジネスの問題でもあるだろう。地名によって地価は変わってくるからだ。不動産として、そこは断じて貧乏な江戸下町のイメージであってはならず、高級感漂う山の手の一等地でなければならなかった。
さらに言えば接続されたカタカナ語は、郊外から都心へ、ニュータウン的な感性が逆流入していることを示唆するのではないか。山手線上の「高輪」と「ゲートウェイ」の出会いには、“土地の詩”としての「マンションポエム」(大山顕) の響きがある。
仮にそれが現在の東京のリアリティだとしても、しかし私は、この駅名が「芝浜」であると女房に嘘をつかれてみたい。そして 3 年後の大晦日に、ほんとうは「高輪ゲートウェイ」だと打ち明けられても、夢から醒めずにいてみたい。

5. Close Window
6. Open Window
地区：渋谷区桜丘町

渋谷は再開発の真っただ中にある、まさに「普請中」の街だ。
特に駅周辺は、2020 年を目処に大規模な開発プロジェクトが進行しており、日夜その風景を変化させている。なんでも、回遊性の高い立体的な歩行者動線「アーバン・コア」を整備して、9 つの「複合施設」を建設するらしい。じじつ、既に渋谷ヒカリエを皮切りとして、渋谷ストリームや渋谷スクランブルスクエアといった商業ビルが続々と開業している。
それに伴い、西口から 246 を渡った先にある桜丘町一帯も、ずっとフェンスで囲われていて、気づけば町そのものがなくなってしまった。小さな個人商店の多いその辺りは、渋谷の“裏”という感じで

気に入っていて、昔からよくぶらついていたのだけれど。
更地になる直前に覗きに行くと、あらゆる建物の窓ガラスに「※」で貼られたガムテープが、妙に印象的だった。空の向こうには、アミダクジみたいなファサードのビルが峙っている。これから渋谷は、その最上階に取り付けられた「Google」のロゴにずっと睥睨されることになるのだ。
マルセル・デュシャンは、第一次世界大戦後の 1920 年に、レディメイド作品として《フレッシュ・ウィドウ [なりたての未亡人] 》を制作した。小型のフランス窓に黒い革で覆われたガラスをはめ込んだそのオブジェは、窓外の視界を頑なに閉ざしている。
閉じられ、そして再び開かれる渋谷の窓からは、その先の景色を見通すことができるのだろうか？

7. Tokyo Suicide Girl Returns
地区：台東区千束

東京は何度も「死」を経験している。
江戸にしろ東京にしろ、大きな変化を伴う時にはいつも、地震、大火、洪水、戦災といった「災害」が絡んでいた。それは江戸文化の中心だった“不夜城”吉原も例外ではない。
浅草の芝居町に並ぶ「二大悪所」として、頽廃的な洗練を極めた吉原遊郭は、もともと江戸時代の初期、日本橋に誕生している。やがて明暦の大火の後、辺鄙な周縁に位置する浅草寺の裏手に移されたのが（新）吉原である。
それからも吉原の被った災害は、安政の大地震、吉原大火、関東大震災、そして東京大空襲と立て続く。いずれも妓楼や茶屋が数百軒規模で焼失する壊滅的な被害を受け、その度にたくさんの遊女たちが亡くなってきた。
ただ、災害でなくとも、20 代で早死にする遊女は多かったという。幼い時分に女衒に売られ、不自由で働きずくめの生活の中、荒淫、妊娠、中絶、性病、病気、借金による心労と、彼女たちの生涯は辛く厳しいものだった。場合によってはそれら全てを投げ出して、剃刀で首を切って死のうとしたり、惚れ合った客と心中を計ったりしたそうだ。
日本堤から脇へ入ると、今でも一帯は歓楽街である。もちろんかつての面影はないが、焼け跡から「復興」を繰り返してきたことを想えば、それも詮無いことだろう。
男一人歩いていると、すかさず客引きに声をかけられる。目を泳がせながら吉原大門をくぐり抜け、淋しげに残された見返り柳を見返す。通りの果てには、まるで巨大な樹木のようなスカイツリーが聳え立っている。

8. New World Border -OLYMPIA1896-
9. New World Border -OLYMPIA1936-
10. New World Border -OLYMPIA1964-
11. New World Border -OLYMPIA1972-
12. New World Border -OLYMPIA1980-
13. New World Border -OLYMPIA1984-
都市：アテネ、ベルリン、東京、ミュンヘン、モスクワ、ロサンゼルス

現在の東京は、オリンピックによって作られたと言っても過言ではない。
1964 年の東京五輪に向けて、渋谷地区発展の礎となった所謂「オリンピック道路」や、日本橋の上をまたぐ首都高速道路、東海道新幹線、東京モノレールといった数々のインフラが整備されている。高度経済成長と同期して、東京の姿を大変貌させたその都市改造は、当時の日本が敗戦からの「復興」を世界に示す上で、それなりに重要な意味を担っていたと言える。
一方で、2020 はどうだろう。東日本大震災の余波が色濃い 2013 年に招致が決定し、コンパクトな「復興五輪」として喧伝された東京オリンピックだが、開催費の高騰や、マラソン開催地の札幌への変更など、数多の混乱は今も続いている。それは控え目に言って、2025 年の大阪万博を含め、この国に山積した問題を覆い隠す追憶の空騒ぎとしか思えない。
アルテ・ポーヴェラのアーティストであるアリギエロ・ボエッティの代表作に、《MAPPA》がある。各国の領土ごとに国旗が縫い込まれた、世界地図の織物だ。その作品を下敷きに、世界の国境線が迷彩柄のように混沌と化しつつある現代、“新しい地図”を提示するのが《New World Border》シリーズである。本展では、近代オリンピック史を遡る。
取り上げるのは、1896 年にアテネで開催された第 1 回大会、1936 年にナチス政権下で敢行されたベルリン大会、1964 年東京大会、パレスチナゲリラのテロ「黒い九月事件」が起きた 1972 年ミュンヘン大会、ソ連のアフガニスタン侵攻で西側諸国がボイコットした 1980 年モスクワ大会、そして今度は逆に東側諸国がボイコットし、初の完全民営化五輪としてオリンピックが「商業化」した端緒にあたる、1984 年のロサンゼルス大会だ。
それぞれの大会参加国の全国旗を改めて翻させることで、レニ・リーフェンシュタールによる映画『オリンピア』を引くまでもなく、近代五輪が担ってきたある種の〈イデオロギー〉を炙り出すことを試みる。

14. TOKYO CLEAN UP AND DANCE !
地区：明治神宮 内苑 — 外苑

1964 年 10 月 16 日、東京オリンピックの開催期間中に、高松次郎・赤瀬川原平・中西夏之からなる前衛芸術グループ「ハイレッド・センター」は、銀座の街頭で「首都圏清掃整理促進運動」を行った。「BE CLEAN ！」と書かれた看板を立て、赤い腕章をした白衣姿で、路面を「清掃」するパフォーマンスだ。
オリンピックを間近に控え、町中が都市衛生の向上を図り、美化運動に邁進していた時期に考案されたこのイヴェントは、赤瀬川原平が『東京ミキサー計画』で書いているように、慌ただしく「ゴミ」を隠し、外面を「キレイ」に取り繕おうとする東京への、痛烈なアイロニーだった。
そのオマージュとして、2019 年の明治神宮内苑・外苑エリアを〈清踊〉する。
そもそも明治神宮は、崩御した明治天皇の遺徳を讃えるために作られた記念物だ。それは代々木の「森に包まれた神社」である内苑と、青山の絵画館やいちょう並木、スポーツ施設からなる外苑との 2 部で構成されており、2 つの空間は、南北 2 本の連絡通路（表参道と裏参道）でつながれている。
またその一帯は、1964 年のオリンピックによって大きく発展した地域だ。実際、巡ったコースには、国立代々木競技場（丹下健三設計）に始まり、五輪橋やコープオリンピアといった建造物がいくつも残されていた。さらに、2020 年に向けた新しい施設である新国立競技場や JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE なども、既にその全貌を現している。
そんな風景の中で、2 度目の東京五輪の前夜、私たちは踊るように清掃する、あるいは、清掃するように踊る。

33. Shuttle RUN for 2020
34. Shuttle RUN for 2021
地区：新国立競技場

運動習慣のない私がスポーツと聞いて思い出すのは体育の授業である。
そこには何か強制めいた、気怠い空気が漂っていた。体力テストに対し全く気乗りしなかったのは言うまでもない。特にシャトルランはやりきれなかった。走ることによって何処かに到達できるならまだしも、一切の前進も後退もなく、同一線状を往復し続けることには徒労感が募った。しかも、警笛じみた無機質な合図音は刻々と早まっていく。処置に間に合わなければ爆発してしまう時限爆弾の導火線のように、それは焦燥感を掻き立てた。
2017 年 8 月、蒸すような猛暑の中、神宮外苑へと足を運んだ。新国立競技場の建設現場には幾台ものクレーンが林立していて、青々とした空に幾重にも伸びた赤い鉄尖が突き刺さっている。
仮設のレガシー。
ふとシャトルランが脳裏をよぎった。
前進のない終わりなき反復も、加速度的に迫るタイムリミットも、じりじりと積もる焦慮も、疲弊も、今私たちの眼前に広がっているものではないか？……
さらに、2 年後の 8 月、ほとんど完成した競技場を尻目に、全く同じ場所で、同じ行為を再撮した。
むろん、シャトルランは単なる持久力測定テストであり、オリンピック種目ではない。

15 - 32. Tokyo Barracks
地区：東京一帯

1923 年（大正 12 年）9 月 1 日、関東大震災が日本を襲った。
下町の大半がなぎ倒され、東京は文字通り焼け野原と化す甚大な被害を受けている。ただ、その荒廃の中から、新しい文化の萌芽が見られたことも事実だ。例えば震災の直後、「考現学」の創始者・今和次郎は、吉田謙吉らと共に「バラック装飾社」を結成し、「野蛮人の装飾をダダイズムでやる」として、次々と建ち上がるバラック群のファサードに、ペンキで絵を描いたのだった。
現代で言えば、彼らの手つきはさながらグラフィティ・ライターである。思えばヒップホップ・カルチャーもまた、ロバート・モーゼスが手掛けたニューヨークの都市計画の「失敗」によって、サウス・ブロンクスの瓦礫から生まれたものだった。
未だ 3.11 の記憶が生々しいのはもちろん、昨今の異常な「天気」がもたらす災害に日々苛まれている私たちは、今、ここから、どのような文化を立ち上げることができるのだろうか。
ひとまず私は、「バラック装飾社」のネガとして、関東大震災後の惨状を写す絵葉書の上に、現在の東京の街並みを描きつける。

35. EED — Empty Emperor Donut —
地区：千代田区皇居

東京の中心は、ぽっかりと穴が空いている。まるでドーナツだ。
そこに位置するのは、言うまでもなく皇居である。大都市のど真ん中にあって、深い緑に覆われた、ほとんどの人が入れない場所。だが、それは決して無意味にないのではない。穴がなければドーナツはドーナツたり得ないように、ないということでありありとある。もしかすると、それが「象徴」ということなのだろうか。
こんどは、明治から令和まで、日本近代の時間軸を視覚的に考えてみる。ちょうど中心にくるのは、太平洋戦争だ。大きく穴の空いたグラウンド・ゼロ。終戦を告げたのは、1945 年 8 月 15 日正午、ラジオから流れる昭和天皇の「玉音放送」だった。今聴き返すと、神から人へと転身するその刹那、虚無的な陥穽において発せられた〈言葉＝玉音〉が、既に戦後の天皇像の原型にあたるような、「災禍」に寄り添い「建設」への意志を宣言する内容であったことに、改めて驚かされる。最近知ったのだが、その音声は生放送ではなく、終戦前日の 8 月 14 日に録音されたものなのだという。記録したメディアは、レコード盤だった。
東京は、皇居の周りをぐるぐると回るレコード（Donut）だ。お堀沿いの楽曲（Tracks）/走路（Ceb）の上を、皇居ランナーが周回している。このまま回り続けたら、いつか東京はバターになって溶けて消えてしまうかもしれない、『ちびくろサンボ』の 3 匹のトラのように。トラ・トラ・トラ。始まりの合図。終わりの合図。どこからか幽かに金槌の音が聞こえてくる。それは東京を砕く音だろうか、それとも造る音だろうか——？

いずれにしろ、普請の音は鳴り止まない。

堪ヘ難キヲ堪ヘ、トカトントン。
忍ビ難キヲ忍ビ、トカトントン。
総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ……トントントカトン、トカトントン。

主要参考文献
川添登『東京の原風景』(ちくま学芸文庫 , 1993)
森鷗外「普請中」(『三田文学』, 1910)
エドワード・サイデンステッカー『東京 下町山の手』(安西徹雄訳 , ちくま学芸文庫 , 1992)
エドワード・サイデンステッカー『立ちあがる東京』(安西徹雄訳 , 早川書房 , 1992)
陣内秀信『東京の空間人類学』(ちくま学芸文庫 , 1992)
マイケル・R・テイラー「レディメイド」(『デュシャン　人と作品』, フィラデルフィア美術館 , 2018)
矢野誠一『落語手帖』(講談社 +α文庫 , 1994)
菊地ひと美『廓の媚学』(講談社 , 2017)
多木浩二『スポーツを考える——身体・資本・ナショナリズム』(ちくま新書 , 1995)
小川勝『オリンピックと商業主義』(集英社新書 , 2012)
沢木耕太郎『オリンピア　ナチスの森で』(集英社文庫 , 2007)
『Alighiero e Boetti』(Whitechapel Art Gallery, London, 1999)
赤瀬川原平『東京ミキサー計画』(ちくま文庫 , 1994)
赤瀬川原平『路上観察学入門』(ちくま文庫 , 1993)
椹木野衣『戦争と万博』(美術出版社 , 2005)
中沢新一『アースダイバー　東京の聖地』(講談社 , 2017)
今和次郎『考現学入門』(藤森照信編 , ちくま文庫 , 1987)
ジェフ・チャン『ヒップホップ・ジェネレーション』(押野素子訳 , リットーミュージック , 2016)
ロラン・バルト『表徴の帝国』(宗左近訳 , ちくま学芸文庫 , 1996)
太宰治「トカトントン」(『群像』, 1947)
etc.